ラグーザ《山尾庸三像》

明治維新後、近代国家の確立を目指して殖産興業を推し進めてきた新政府は、欧米の最新の技術や学問を取り入れるため、多くの外国人指導者、いわゆる「お雇い外国人」を招き入れた。その一人であるイタリア人彫刻家、ヴィンチェンツォ・ラグーザ（1841-1927）は、明治9年（1876）に開校された日本初の官立美術学校、工部美術学校で西洋の彫刻技術を指導した人物である。ひたすらに“写実描写”を重んじた彫刻技術を教え、自らも日本滞在中に多数の作品を制作した。

本像は、ラグーザが滞日中に制作した石膏像《山尾庸三像》（東京藝術大学所蔵）を昭和6年（1931）に教え子の菊地鋳太郎（1859-1945）がブロンズに鋳造したものである。山尾庸三（1837-1917）は長州出身で、幕末期には高杉晋作らの攘夷運動に加わり、伊藤博文、井上馨らと共に英国へ密航留学をした人物としても知られている。新政府では工業技術の発展を訴えて工部省の設立に貢献し、現在の東京大学工学部の前身である工学寮（のちの工部大学校）を設立した。

工部美術学校は工学寮の附属機関であった。つまり、ラグーザにとって山尾は日本に来ることとなったきっかけを作った人物であり、大きな存在だったであろう。本像に見られる身体の厚みを感じさせる衣服の表現や、細部まで丁寧に彫られた顔貌表現は彼の写実技法を表す一方、洋装を着こなした凛とした佇まい、威厳に満ちた眼差しからは、政府官僚としての山尾をどこか理想化して表現しようとする姿勢が窺える。

《山尾庸三像》鋳造：昭和6年（1931）
ブロンズ　個人蔵

恐れ入りますが、画像の閲覧をご希望の方は、ミュージアム・レター本誌をご覧ください。

《山尾庸三像》 明治10-15年（1877-82）頃
石膏　東京藝術大学所蔵

平成12年（2000）、東京藝術大学では、石膏の《山尾庸三像》が修復されるのに伴い、新たな《山尾庸三像》が鋳造された。本像と比べると、顔や衣服における皺がより忠実に再現されている点に注目される。この2体のブロンズ像からは、各時代における鋳造技術の様相を窺うことが出来、興味深い。

なお、本像には正面向かって左脇腹付近に「RAGUSA VINCENZO」という銘が、背面にはラグーザのプロフィールと共に、昭和6年に菊地が鋳造したことが記されている。併せてご覧頂きたい。

（助教　柳澤恵理子）

本山白雲《銅製瓢箪蜻蛉瓶》

瓢箪の実のふっくらとした丸みと質感の再現。緩やかに巻いた蔓にとまる蜻蛉は、触れれば飛び立つかという精巧さ。

この《銅製瓢箪蜻蛉瓶》は、昭和5年（1930）3月5日に、当時の皇太后（大正天皇の皇后であった貞明皇后）から山階芳麿（1900-1989）へ下賜されたものである。

《銅製瓢箪蜻蛉瓶》の胴の裏には「白雲」の銘がある。

制作者の本山白雲（1871-1952、本名：辰吉）は、土佐出身の彫塑家で、現在も桂浜に立つ坂本龍馬像や国会議事堂内の伊藤博文像をはじめ、幕末の志士や明治の元勲の銅像の原型を数多く作った人物である。宿毛山内家の家臣であった本山家に生まれた辰吉は、幼い頃から絵や物造りが巧みな少年であった。高等小学校までを宿毛で学んだ後、維新で家禄を失った家計を助けるため母校の代用教員となるが、明治21年（1888）彫刻家を目指して上京する。旧主の伊賀陽太郎や、北海道開拓の父と呼ばれ当時元老院議官となっていた岩村通俊など同郷出身者の援助を受け、彫刻の大家・高村光雲に弟子入りした。翌年には開校間もない東京美術学校に入学し木彫や鋳造技術を学んだ。この頃同校の教授となり帝室技芸員に任ぜられた光雲は、白雲の才能を高く評価していたと見られ、在学中の白雲を自宅に寄宿させ指導するほか、皇居外苑の楠公像（楠正成像）や上野公園の西郷南州翁像（西郷隆盛像）の原型制作に助手として携わらせ、自身の名から一字とった「白雲」の名も与えている。白雲は卒業後も、美術学校に新設された塑像科の教授・長沼守敬に西洋塑像技術の指導を受けるなど最新の技術を取り込みつつ、岩村通俊が企画した明治の元勲たちの銅像の原型制作を全面的に担当し、当時の元勲の銅像で彼の手にかからないものはないと言われるほどであった。昭和3年、白雲自身が紐を引いた桂浜の坂本龍馬像除幕式は、海軍総出で盛大に行われた。白雲作の銅製花瓶が皇太后から山階芳麿に下賜されたのはその2年後である。

《銅製瓢箪蜻蛉瓶》山階鳥類研究所より寄託

本山白雲の代表作・桂浜の坂本龍馬像

本山白雲は文展や中央の美術団体には参加しなかったが、唯一参加した「土陽美術会」は土佐出身の美術家の集まりで、会頭に就任した田中光顕の援助により多くの作品制作や展覧会が開催されるようになった。第6代学習院長であった田中光顕は、明治31年から明治42年まで11年間に渡り宮内大臣を務めた人物であり、こうした人間関係が作品の制作や流通に影響したことも想像に難くない。

アジア・太平洋戦争中の金属供出により白雲が原型を制作した銅像の多くは失われ、それらの原型も戦時中に白雲自らが打ち砕き埋めたという逸話が残る。銅像以外の作例も少なく東京芸術大学や故郷の宿毛に数点が確認されるのみとなった現在、《銅製瓢箪蜻蛉瓶》は本山白雲の大変貴重な作例といえるだろう。

（学芸員　吉廣さやか）